

平成23年度 **北海道出身海外移住者子弟留学生及び  
北海道海外技術研修員の修了式**

平成24年3月22日(木) 於・ホテルポールスター札幌

HIECCは毎年南米諸国の道人会からの技術研修員等を受け入れ、専門技術の研修を支援し、北海道との交流を担う人材育成に努めている。平成23年度は、北海道出身海外移住者子弟留学生として西岡ヒカル(ブラジル)と北海道海外技術研修員として西村明(パラグアイ)が来道した。西岡さんは北海道医療大学薬学部で「胆汁酸の定量のためのHPLC-MS法の開発」をテーマに研究を、また西村さんは(学)宮島学園北海道製菓専門学校で製菓技術の習得を、それぞれ3月に修了した。

修了式では、HIECCの高橋了副会長兼専務理事が、帰国後は今回の研修の成果を生かして活躍を言葉で贈り、研修期間中の努力を称えた。また、来賓の篠原正行北海道国際課長からは感謝状が贈呈され、さらに「将来とも北海道との良き架け橋に」と北海道国際協力友好推進員の委嘱状が手渡された。

修了式のスピーチで、西岡さんは「祖母の従姉や祖父の弟に会って、祖父の面影を見て懐かしかった」、「北海道の生活で四季の移り変わりを楽しみ、たくさん思い出ができました」。西村さんは「学校ではレベルの高さにとまどうこともありましたが、先生たちに励まされて頑張りました」、「実習先でも良い人々に出会えました」とそれぞれお礼の言葉を述べた。

北海道ブラジル協会の堀内一男会長が挨拶をして修了式を終えた。2人は3月末に帰国の途についた。



研修員の西村さん(前列左端)、留学生の西岡さん(同右端) 中央に篠原課長(左)と高橋専務理事

# であい



公益社団法人  
**北海道国際交流・協力総合センター**  
**HIECC/ハイエック**  
(旧 社団法人北方圏センター)  
Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

HIECCでは、去る2月18日(土)に(財)仙台国際交流協会企画事業課企画係の菊池哲佳さんを招いて、被災した外国人の支援にあたった体験や課題などを聞いた。

(財)仙台国際交流協会では、平成23年3月11日の東日本大震災の発生以降、仙台市が仙台国際センター内に設置した仙台市災害多言語支援センターを運営し、市民ボランティアや関係機関からの協力を得て、外国人被災者のための多言語情報提供や相談などを行った。

平成24年2月18日(土)、かでの2・7会議室で開催。(公社)北海道国際交流・協力総合センター(HIECC)主催、(公財)札幌国際プラザ共催。



震災2日目一暗闇の中での活動

## 特集

平成23年度 多文化共生セミナー in 札幌  
「災害時における外国人支援」

「東日本大震災での外国人支援について」

「日本人だけでなく、みんな困っている」という視点を大切に

## 北海道災害支援多言語サポーター募集

HIECCでは、災害時に正確で最新の情報を届けるなど被災した外国人を「言語面」でサポートするサポーターを募集しています。

### どのような活動を?

被災地の依頼に基づいて、被災地の自治体の職員またはHIECC職員と協力して、

- 外国人被災者のいる避難所を巡回、通訳などをする
  - 災害対策本部などから発表された情報の翻訳をする
- サポーター活動に対する報酬はありませんが、移動に際しての交通費は支給されます。平時には当センターが行う研修会や避難訓練に参加して研修などをします。

### どのような資格が?

- 実用会話が可能レベルの語学力を持つ方
- 北海道在住の20歳以上の方(国籍は問いません)

### 登録申込先・お問合せ

公益社団法人 北海道国際交流・協力総合センター(HIECC/ハイエック)へ申込書を送って下さい。  
※申込書はこちらからダウンロードできます。  
URL <http://www.hiecc.or.jp>  
060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館12階 HIECC交流部  
TEL: 011-221-7840 FAX: 011-221-7845  
Email: [exch@hiecc.or.jp](mailto:exch@hiecc.or.jp)

7月9日(月)から  
**「外国人住民の  
住民基本台帳制度」**  
がスタートします!

住民基本台帳法の一部を改正する法律により、外国人住民にも住民票が作成されることになりました。これにより、①外国人を含む世帯の証明書(住民票の写しなど)が発行できるようになったり、②届け出の簡素化が図られたり(例:住所変更の届け出で国民健康保険の届け出があったとみなされるなど)、③在留資格や在留期間の変更について、地方入国管理局のみの届け出で済むようになります。

現在、外国人登録されている方は、各市区町村から送付される「仮住民票」の記載内容の確認が必要となります。

また、7月9日以降に入国する中長期在留者になる外国人は、入国港(制度導入当初は成田、羽田、中部、関西空港に限定)で「在留カード」が交付されます(その他の入国港においては、旅券に「在留カード後日交付」と記載され、後日カードが交付されます)。よって、中長期滞在の外国人は、居住地の市区町村の窓口で「転入届」の手続きをする流れになります。

制度に関するお問い合わせは、外国人在留総合インフォメーションセンター(平日 8:30~17:15)へ。日本語だけでなく、英語、韓国語、中国語、スペイン語、ポルトガル語で対応しています。

お問合せ先電話 TEL:0570-013904 (IP電話・PHS・海外からは03-5796-7112)

**\*住民基本台帳法における転入届・転居届については、最寄りの市区町村までお問い合わせください。**



公益社団法人  
**北海道国際交流・協力総合センター**  
**HIECC/ハイエック**  
(旧 社団法人北方圏センター)

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館  
発行日: 2012年6月5日  
TEL.011(221)7840 FAX.011(221)7845 <http://www.hiecc.or.jp>  
E-mail: [pbl@hiecc.or.jp](mailto:pbl@hiecc.or.jp) (調査研究部) [into@hiecc.or.jp](mailto:into@hiecc.or.jp) (国際協力部)  
印刷: 岩橋印刷株式会社

### 地震直後に駆けつけた災害時言語ボランティア

仙台市は災害時に日本語が不自由な外国人に情報を届けるなどの支援をするために、「災害時言語ボランティア」(日本語、外国語を問わず実用会話レベルの語学力をもつ18歳以上の男女)を募集して登録、平時には仙台市の防災訓練や国際交流協会の行う研修会に参加してもらっているもので、震災時には約70名が登録していた。自らも被災者でありながら、地震発生直後から「できることはないか」とセンターに駆けつけ、停電の続く中、昼夜を問わず、翻訳、電話対応、連絡に携わってくれたことに感動したと、菊池さんは当時の緊迫した状況を振り返っていた。



避難所での急ごしらえの多言語表示

### 平時での人とのつながりが生きた協力態勢

支援センターの運営開始前に多言語による災害情報を発信しようと言語ボランティアと共に地元FM局Date fmに向かった。電話は不通であった。「言語ボランティアの協力を得て放送で読み上げる内容を考え、迅速に翻訳し、放送することができました」。同局とは防災情報番組の提供で日頃から協働して顔の見える関係を築いていたことが力を発揮したという。翌日以降、公共交通機関が復旧せず、ガソリン供給もままならない中、多くのボランティアが支援センターに駆けつけてくれ、翻訳や発信、外部からの問合せに対応するなど大きな役割を果たした。(活動の内容は別項を参照)



fmラジオ局での収録、放送の様子

### 仙台市災害多言語支援センターの開設

同センターは、震災当日の平成23年3月11日(金)から同年4月30日(土)までの51日間にわたって設置され、最初の6日間は24時間体制で運営された。仙台市における外国人登録者数は10,271人(平成23年3月1日現在)で全人口の約1%にあたる。国別では中国と韓国の出身者がほぼ7割を占めている。

期間中の運営時間は、【24時間体制】3月11日~3月16日、【9:00~21:00】3月17日~3月19日、【9:00~19:00】3月20日~4月30日で、①多言語による情報提供(ホームページ、メールマガジン、ラジオ放送等)、②多言語による相談対応(電話、Eメール、来館)、③避難所等巡回、④大使館、メディア等対応であった。

### 活動内容

仙台市や関係機関からの被災状況や、支援、ライフライン、交通、原発関連、医療等の情報を日本語、英語、中国語、韓国語等に翻訳し、インターネット、ラジオ、避難所巡回、外国人コミュニティへの配布等により広報した。ブログやメルマガなどによる配信数は500回、ラジオ放送は51日間に及んだ。51日間での多言語による相談対応は電話、Eメール、来館など計1,112件、内容別には安否情報479件が第一位であった。以下、帰国/国内避難132件、ボランティア活動95件、交通、被災情報、原発、生活情報、物資提供、ライフライン、医療、その他であった。



相談窓口と情報の翻訳・発信



**@函館市** 多文化共生シンポジウム

中国出身の時さん、東日本大震災で外国人が感じた恐怖を語る



2月11日(土)、函館市では、(特活)多文化共生マネージャー全国協議会の時 光氏を講師に迎え「災害時における外国人支援」と題し(財)北海道国際交流センター(hif)と共催でセミナーを行った。時氏は、中国遼寧省の出身で2001年に留学生として来日し、現在、(特活)全国市町村国際文化研修所のコーディネーターとして活動していて、特に外国人の視点で災害時支援の話をした。講演の冒頭、中国語で緊急速報のシミュレーションをしたところ、それを聞いた参加者から「中国語が分からないからこそなおさら“怖い”と感じた。3・11のときに外国人が感じた恐怖はそれ以上だったと思う」という感想があった。参加者には大きなインパクトがあったようだ。

時氏の具体的な話から、災害弱者となり得る在住外国人への情報提供や避難訓練などに取り組んでみたい等今後の活動展開に期待する声に参加者からあがっていた。



**International Time**  
インターナショナルタイム  
@苫小牧中央幼稚園



苫小牧市に拠点を置くNPO法人「エクスプローラー北海道」は市内の幼稚園で毎月1回「インターナショナルタイム」を実施し、園児たちが様々な国の言葉や歌、ダンスなどを母親たちと一緒に学んでいる。2月23日(木)には北海道国際交流・協力総合センター(HIECC)で受入をしている留学生の西岡ヒカルド君(ブラジル)と技術研修員の西村明さん(パラグアイ)の2名が苫小牧中央幼稚園を訪れ、南米の文化や踊りを園児たちに伝えてきた。

最初に園児たちが南米の子どもの踊り「ソイウナタザ」を披露。偶然にも今回訪問した2人も知っていて、みんなで楽しむことができた。次に、留学生たちが写真を見せながら有名な観光地や代表的な動物などを紹介。特に食べ物やお菓子の話になると、園児たちは身を乗りだして「食べたい!」「行きたい!」と興味津々に聞いていた。

続いて、お国紹介のお礼にと園児たちが日本の遊び「はないちもんめ」を紹介してくれた。手をつなぎ、誰が欲しいか…、相談しているうちに園児たちと留学生の距離は一気に縮まり、流れで南米の子どものダンス「Chu-chu-a」を踊った。愉快的音楽と滑稽な動きに園児はもちろんお母さんたちや先生たちまでも声を出して笑いながら踊っていた。踊りの後に西村さんが「皆さんに南米のお菓子・アルファフォルを作ってきました!」と伝えると、園児たちからは「わ〜!」と大歓声があがった。給食の時には甘いお菓子をおいそうに頬張っていた。

西岡君と西村さんの二人の訪問が、同会が目指す「世界に興味を持ち、世界に心を拓き、北海道に誇りを持つ地球市民の育成」に少しでも役立つことができたのではと思う。将来、園児たちが西岡君と西村さんに会いに南米に行く日が来るかもしれない。



「Chu-chu-a」は楽しい!



「インターナショナルタイム」で学んだ世界のあいさつ

地域の国際交流

さっぽろ 留学生日記



ジャイナ・ジャルキンキジさん  
(カザフスタン共和国)  
北海道大学大学院文学研究科歴史地域文化学専攻  
北方文化論講座(大学院1年目)  
日本語能力試験1級取得

とにかく素敵なカザフ人

130の民族がいるカザフスタン

日本の面積の7倍を超える広大な国に1600万人が住む。ジャイナさんは日本人と似た風貌で、よく間違われる。彼女曰く「カザフスタンにある日本大使館のある男性職員はカザフスタン人にそっくりで、街中で道を聞かれたりするらしいです」。ところがこのカザフ人、カザフ系とロシア系で全体の8割以上を占めるが、それで終わらない。ウズベク系、ウクライナ系、ウイグル系、タタール系、ドイツ系などジャイナさんによると「130の民族がいます」。ロシア人、中国人、西アジアやヨーロッパ人の顔、顔。何百年もの年月、この地域を歩き交った人々のDNAが受け継がれている国。かつての人気TV番組NHK特集「シルクロード」の世界を思い描いてしまう。ところで、一見よく似ているカザフ人と日本人だが、立ち居振る舞いが違うのですぐ見分けられるそう。子どもは同じだが大人になると違ってくるとか。



カザフスタンの民族衣装

修士号取得を目指して勉強中

ジャイナさんの話の中に、屈折語と膠着語という言葉が出てきた! 言語学でロシア語やフランス語など語尾変化があるのを屈折語、日本語やカザフ語のように語尾変化のないのを膠着語と呼ぶ。語彙をそのまま繋げて表現する点で日本語とカザフ語は似ているそう。ジャイナさんは、カザフ語と日本語の補助動詞の対照研究をしており、「～ている」、「～である」という表現の様々な用法とカザフ語のそれにあたる補助動詞の形式を比較し、分析する。日本語はカザフ語と同じアルタイ語族に属していると言われるがこれは仮説で、「日本語の言語としての系統はいまだに不明」だそう。「南太平洋の諸島で話される諸言語と共通しているかもしれません。いくつかの学説があります」。在籍する大学院の講座の案内に、「日本列島から北東ユーラシア、環北太平洋地域へと広大な時間と空間における物質文化から精神文化、言語文化まで対象にしています」とあった。やはり遙かシルクロードの世界である。

アルファラビ大学(アルマトゥ)で日本語を学びました

アルマトゥは人口およそ150万人で、旧ソ連時代にロシア語でアルマ・アタとも呼ばれ、独立以降1997年アスタナに遷都されるまでカザフスタン共和国の首都であった。現在もカザフスタン最大の都市で商工業や文化の中心である。

そのアルマトゥにあるアルファラビ大学東洋学部日本学科で学んだ。日本との最初の接点は日本のアニメだったとか。「日本語の発音がきれいで、話せるようになりたいと思いました」とジャイナさん。

読書好きで、日本の作家では東野圭吾や宮部みゆきが、海外ものではコナン・ドイルの「シャーロック・ホームズ」を英語、ロシア語、中国語、日本語で読破した。日本語訳は「文法構造の異なる英語からの翻訳がすごく良くできていた」と思いました。



1997年12月に首都として宣言されたアスタナの中心部

留学生、「萌えっこ春待里」に参加

留萌市

HIECCの留学生地域交流支援事業が3月4日から1泊2日で留萌市で行われた。この事業は、留学生にとって行く機会が少ない地方都市に出かけて地元の祭り等に参加し、住民との交流をとおして地域を知ってもらおうというものである。



留萌市冬まつり「萌えっこ春待里」に合わせ、札幌市内及び近郊で学ぶ11名の留学生・技術研修生が参加した。この冬はこのほか気温が低かったため道路事情等を考慮して早めに出発したのが幸いして、「るもい健康の駅」で血圧・骨密度測定を行っているのに行き合い、思いがけず留学生たちも測定してもらった。

受入窓口の冬まつり実行委員会委員長のひとり村山ゆかりさん、珍田亮子市議会議員には、留学生のために多くのプログラムを企画していただいた。到着日の夕食交流会には、高橋定敏留萌市長も出席、地元の代表7名も交えて交流の輪が広がった。祭り当日のメインは「人間ばんばレース」。重量700kgのニシン舟に100kgの重りを乗せ、留学生チームとして勇んで参加し、懸命に引いたが、残念ながら予選敗退。次は個人戦の「甘エビ争奪じゃんけん大会」。これも全員惜しくも決勝に進めなかった。限られた時間を、各自自由に会場を回り、暖かい出店のスープを食したり、市民と写真を撮り合ったりと、寒さの中で熱い交流を行った。

毎日の学業中心の地を離れひと時、地方での住民とすごした時間は留学生活の楽しい思い出の一つになったに違いない。